

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2016

課題番号：25300009

研究課題名(和文) 地方政治の中・露・印比較 社会政策，地方自治，政党政治

研究課題名(英文) Comparative Local Politics among China, Russia, and India: Social Policy, Self-governance, and Party Politics

研究代表者

田原 史起 (TAHARA, Fumiki)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：20308563

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の成果は大きく、以下の三点にまとめられる。第一に、本課題は合計9回のフィールド・ワークにより中国、ロシア、インド三国の地方政治を理解するための一次データを蓄積した。第二に、フィールド・ワークによる基礎データの蓄積の上に立ち、三国比較研究の視点から、いくつかの概念化を試みた。この概念化作業により、従来の一国主義的な地方政治研究が無意識のうちに見逃してきた各地域の政治的特質に新たに光を当て、汲み取ることが可能になった。第三に、三国の地方政治に関する生データと幾つかの概念化の結果を、大学での教学の場を借りて社会的還元を行うことに努めた。

研究成果の概要(英文)：This study achieved the following: First, through a total of nine fieldtrips that we conducted in China, Russia, and India, we accumulated first-hand micro data regarding local political life in the three countries. Second, based on profound grass-root field information, we re-discovered and conceptualized specific features of rural political life, which preceding area studies solely dealing with one country have largely omitted. Third, we attempted to diffuse the above-mentioned research findings through academic lectures in Japanese university courses.

研究分野：農村社会学

キーワード：地方政治 比較 社会政策 地方自治 政党政治

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトは、先行する科研費新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(平成 20-24 年度)の第二班(内政班)の研究成果を重要な踏み台として、それをさらに発展させようとするものである。新学術領域研究の成果の日本語部分は、ミネルヴァ書房より全 7 巻のシリーズ本として刊行済であり、内政班の成果、『ユーラシア地域大国の統治モデル』もその一冊を占める。

ロシア、中国、インドを中核とする「ユーラシア地域大国」は、現在の世界情勢のなかでは、米国一極秩序や EU 主導の国際秩序への挑戦者という立場に立つ国々である。すなわち、これらの地域大国は、一定の経済力・軍事力と近隣諸国への影響力を有するが、政治的自立性、後発成長性、半周縁性などで特徴付けられる国々である。それらはまた、強者の論理としての国際社会の規範、自由化、民主主義、核拡散防止などに対して一定の距離を置くという共通性を有してもおり、三国の比較分析は現代の世界を理解するための枠組みを提出するという意味で、非常に意義深い課題である。

このような重要性にもかかわらず、中・露・印三国を対象とする学術的研究は、一国単位での地域研究を深めることに集中する一方で、本格的な比較研究はほぼ皆無であり、上記の新学術領域研究が世界の地域研究においても初めての試みであった。当然ながら、地方政治という領域の比較に関しても同様の状況がみられた。従来、中国、ロシア、インドの地方政治の比較にかかわる代表的な作品としては、ムーア(Moore, B., *Social Origins of Dictatorship and Democracy*, 1966)、バーンスタイン(Bernstein, T., *Leadership and Mobilization in the Collectivization of Agriculture in China and Russia: A Comparison*, 1971)、スコッチポル(Skocpol, T., *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China*, 1979)、スミス(Smith, S.A., *Revolution and the People in Russia and China: A Comparative History*, 2008)などがあげられるが、いずれも広義の「革命」の歴史的プロセスに関心を寄せており、同時代の地方政治を扱おうとするものではない。あるいは中国とインドの草の根政治の比較を企図した稀有な試みとして、モハンティ等編による著作(Mohanty, M. et al., *Grass-roots Democracy in India and China: the Right to Participate*, 2007)があるが、全体として中国を扱った章とインドを扱った章が並列した論文集となっており、実際の比較分析に乏しく、従来の地域研究に付きまといがちな局限性を体現している。いずれにせよ、実際の現地調査を土台とした三国地方政治の本格的比較研究は、本課題構成メンバー自身によって先鞭をつけられたばかりであ

り、今後さらに深化・発展していく余地は大きい。

次に、ユーラシア地域大国の、とりわけ農村部にかかわる地方政治に焦点を当てることの意義であるが、これは本課題の副題に掲げた三層の分析視角にそのまま重なるものである。

- (1) 「社会政策」の受け皿としての地方政治: 三国はいずれも国内に広大な農村部を抱える。そして農村部の地域社会は概して一国の中の社会的弱者(貧者、高齢者、障害者、被差別民、宗教的マイノリティー)が多く居住する場である。ここから、弱者を含めた諸アクターへの利益再分配の最前線を担う地方政治とは、各国の目指す格差解消、社会的安定とガバナンス能力の向上に大きく影響するファクターであり、これを研究することは、農村開発の実践的な観点からしても重要である。
- (2) 「地方自治」の現場としての地方政治: 三国は形式的にはいずれも地方における「自治」制度を実施している。これらは一見して、普遍的な価値としての民主主義を志向するかに見えるが、各国の地方自治は、実は非常に個性的であり、「地方自治体」としての地方政治・地域社会は、一国のめざす固有の価値意識を端的に反映する現場に他ならない。おなじ地方自治の枠組みで括られる制度が、それぞれの社会的文脈に絡め取られていく様を、実際の地方政治の動態を手がかりにして読み解くのは、三国の政治的な個性を浮き彫りにする上で極めて有意義な作業であろう。
- (3) 「政党政治」の足腰としての地方政治: 三国では、一党独裁の中国、多党制のインドを両極として、非常にユニークな政党政治が展開している。インドとロシアにおいては、地域社会のまともは選挙競争においては時として集票マシンとして機能し、一国の政治システム全体を支えている。その様相を具体的な地方レベルに視線を据えて観察し比較することは、一国の政治システムを理解するうえで有益である。また中国農村の現状を説明する際にも、政党間競争が「存在しない」点に着眼して農村社会における中国共産党の役割を説明することは、これまで看過されてきたポイントだけに重要である。

以上、ユーラシア地域大国が勃興しつつあるなかで、現在進行形の地方政治を比較分析することの重要性が明らかである。しかし、現時点ではそれを可能にするだけのフィールド・データの集積と理論化作業はまだ着手されたばかりであり、いわば萌芽状態にある。以上の認識から、本課題の立案に至った。

2. 研究の目的

中・露・印三国は、米国を頂点とするような画一的、均質的な政治・経済・社会・文化などの発展のあり方に対して異議を唱える存在である。本課題は、ユーラシア地域大国としての中国、ロシア、インドを、欧米を中心とする世界秩序に対する新しい三つの極として位置づけつつ、先行する一国主義的地域研究がなしえなかった「多極的な政治発展モデルの提示」が研究成果の最たるものである。各国住民の日常生活に最も密着した農村部の「地方政治」の観点からアプローチする。その際に、①社会政策、②地方自治、③政党政治という三層の視角から意識的に比較分析を行うことで、一国主義的地域研究では看過されがちな三国の新しい政治的特質、および三国が打ち出している価値意識を抽出する。この目的のために、三国それぞれを専門とする三人の地方政治研究者が、自らの専門地域以外の二国に重点をおいて集中的なフィールド・ワークを実施し、ミクロ・データの集積・共有と相互啓発を行う。

3. 研究の方法

本課題は中国・ロシア・インドという三地域の地方政治について、中国、ロシア、インド三国の地方政治を専門とする三人の地域研究者が、主として自らの本来の専門地域以外の二つの国で現地調査を行うという方法を採用した。

方法的な特色は二つが挙げられる。第一に、「コミュニティ・スタディ」である。すなわち、現地の政治現象を、現地の社会的・文化的コンテクストから切り離すことなく、むしろ現象をコンテクストの中で丸ごと記述すべく、参与観察やインタビューを主眼としてデータを収集したことである。

第二に、「比較研究」である。従来、地域研究者が専門外の地域に踏み込んで研究活動を行うことを阻んできたのは、土地勘と人脈の欠如、言語の障壁などの諸問題であった。そうした意味から、本プロジェクトの三人体制は、地域研究の障壁を除去し、実りのある比較研究を可能にするために、ぜひとも必要なものである。①本プロジェクトの研究代表者、分担者の三名はいずれも長期にわたり、自らの専門地域において基層にまで踏み込んだ研究を積み重ねてきており、地域言語に精通するとともに、現地社会に広い人脈を築いている。②三名は政治学ないしは社会学というディシプリンの面でも接点が多く、地方政治や地域社会を舞台としたフィールド・ワークの経験を持つことから、共通の問題意識から三国の比較を行ううえでの照準がすでに定まっているといえる。③三名は先行する新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の内政班においてもすでに共同研究を

行った実績をもつ。以上のように、本課題の研究体制は機動性の高い少人数でありながら、比較研究のメリットを最大限に引き出すことを可能にするものである。

4. 研究成果

本課題の成果は大きく、以下の三点にまとめられる。

第一に、本課題は、コミュニティ・スタディを通じ、三国の地方政治・社会を理解するための一次データを蓄積した。研究期間内の、メンバーによるフィールド・ワークの実施状況は、以下のとおりである。

1. 2013年8-9月、ロシア・タタルスタン調査(田原)
2. 2014年4-6月、インド・テランガナ調査(田原)
3. 2014年7月、ロシア・タンボフ調査(田原)
4. 2014年8月、ロシア・ダゲスタン調査(中溝・松里)
5. 2015年8月、中国・山東/江西調査(中溝・田原)
6. 2016年1月、中国・雲南調査(松里)
7. 2016年3月、ロシア・タタルスタン調査(田原)
8. 2017年1-2月、インド・西ベンガル調査(松里)
9. 2017年2-3月、アブハジア調査(松里)

第二に、フィールド・ワークによる基礎データの蓄積の上に立ち、さらに比較研究のメリットを生かすことで、非欧米型の地方政治システムを「中国モデル」、「ロシア・モデル」、「インド・モデル」として提示すべく、いくつかの概念化を試みた。その一つとして、「社会政策」「地方自治」「政党政治」の複雑な絡まり合いを集約的に表した「村落」のリーダーシップを、中国における“principal / bystander” (経営者/傍観者)、ロシアにおける“faithful agent” (忠実な代理人)、インドにおける“competitive client” (競争的な顧客)として対比的に概念化を行った。この概念化作業により、従来の一国主義的な地方政治研究が無意識のうちに見逃してきた各地域の政治的特質に新たに光を当て、汲み取ることが可能になったと考える。

第三に、三国の地方政治に関する生データと幾つかの概念化の結果を、大学での教学の場を借りて社会的還元を行うことに努めた。例えば研究代表者の田原は、2016年度の東京大学教養学部後期課程の講義「比較村落ガバナンス論—中国・ロシア・インドの基層社会」において、三国の村ガバナンスを支える農村リーダーと三領域の資源—政府・市場・コミュニティ—の動態について、本課題による知見をふんだんに盛り込んだ議論を展開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 27 件)

1. 松里公孝「宗教とトランスナショナリズム: レニンゴル、沿ドニエストル、クリミアに共通するもの」六鹿重雄編『国会地域の国際関係』名古屋大学出版会、pp. 294-317、2017、査読無。
2. Fumiki Tahara, “A Village Perspective on Competitive Authoritarianism in Russia,” 『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要)20, pp. 87-110, 2016, 査読無。
3. Kimitaka Matsuzato, “Domestic Politics in Crimes, 2009-2015,” *Demokratizatsiya: The Journal of Post-Soviet Democratization*, 24(2), pp. 225-256, 2016、査読無。
4. 松里公孝「クリミア後の世界: 旧ソ連圏の再編とロシアの政策」杉田敦編『グローバル化のなかの政治』岩波書店、pp. 161-190、2016、査読無。
5. 松里公孝「クリミア問題: 社会革命としての東部ウクライナ動乱、およびロシアの関与について」塩川伸明・池田嘉郎編『社会人のための現代ロシア講義』東京大学出版会、pp. 57-76、2016、査読無。
6. 田原史起《中国城镇化未来与县域社会: 走向“多极集中”的路程》《云南行政学院学报》2015年第4期, 第14-21页、査読無。
7. Fumiki Tahara, “Book Review: Shigetomi, Shinichi and Ikuko Okamoto eds., *Local Societies and Rural Development: Self-organization and Participatory Development in Asia*,” *Development Economy*, 53(4), pp. 305-308, 2015、査読無。
8. 田原史起「中国の都市化政策と県域社会—『多極集中』への道程」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』19, 2015, pp. 29-48, 査読無。
9. Fumiki Tahara, “Client, Agent or Bystander? Patronage and Village Leadership in India, Russia and China,” in Shinichiro Tabata ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, London & New York, Routledge, 2015, pp. 85-105. 査読無。
10. 松里公孝「史上最大の非承認国家は生き残れるか—『ドネツク人民共和国』」『Kotoba』18, pp. 174-179, 2015, 査読無。
11. 松里公孝「ウクライナ動乱の一年に思う」『学士会会報』911, pp. 30-34, 2015, 査読無。
12. 中溝和弥「選挙と村人—インド最貧州における民主主義の実践」『地域研究』15(1), pp. 138-158, 2015, 査読無。
13. 中溝和弥「経済成長と宗教ナショナリズム—2014年総選挙から見たインド社会」『アジア研究』61(4), pp. 3-21, 2015, 査読無。
14. Kazuya Nakamizo, “Democracy and Violence in India: the example of Bihar,” Crispin Bates, Akio Tanabe and Minoru Mio eds., *Human and International Security in India*. Oxon: Routledge, pp. 110-127, 2015, 査読無。
15. 中溝和弥「グローバル化と国内政治—グジャラート大虐殺と『テロとの戦い』」長崎暢子・堀本武功・近藤則夫編『深化するデモクラシー』pp. 219-243, 2015, 査読無。
16. 中溝和弥「暴力革命の将来—インドにおけるナクサライト運動と議会政治」石坂晋哉編『インドの社会運動と民主主義—変革を求める人びと』昭和堂、pp. 164-199, 2015, 査読無。
17. 中溝和弥・石坂晋哉「民主政治と社会運動—制度と運動のダイナミズム」田辺明生・杉原薫・脇村孝平編『多様性社会の挑戦』東京大学出版会、pp. 305-332, 2015, 査読無。
18. Kimitaka Matsuzato & Fumiki Tahara, “Russia’s Local Reform of 2003 from a Historical Perspective: A Comparison with China,” in *Acta Slavica Iaponica*, No. 34, pp. 115-139, 2014, 査読有。
19. 田原史起・李増元・喬海彬「"選択性"治理: 当代中国農村社区建設的新機制」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』18, pp. 71-81, 2014, 査読無。
20. M.-R. Ibragimov & Kimitaka Matsuzato, “Contextualized Violence: Politics and Terror in Dagestan,” *Nationalities Paper*, 42(2), pp. 286-306, 2014, 査読無。
21. 松里公孝「ロシア正教会と中国—北京宣教団設立 300年に寄せて」『境界研究』4, pp. 55-68, 2014, 査読無。
22. 松里公孝「ウクライナ政治の実相を見誤るな」『ロシアNIS調査月報』59(1), pp. 55-68, 2014, 査読無。
23. Kazuya Nakamizo, “Poverty and Inequality under Democratic Competition: Dalit Policy in Bihar,” Yuko Tsujita ed., *Inclusive Growth and Development in India: Challenges for Underdeveloped Regions and the Underclass*, pp. 157-180, 2014, 査読無。
24. Kimitaka Matsuzato, “Orthodox hurches in Abkhazia, South Ossetia

- and Transnistria,” Lucian Leustean ed., *Eastern Christianity and Politics in the Twenty-First Century*, pp. 387-401, 2014, 査読無。
25. 松里公孝 「クリミアの内政と政変 (2009-14 年)」『現代思想』42(7), pp. 87-109, 2014, 査読無。
 26. 中溝和弥 「危機の政治史—独立インドにおける危機の克服」『年報政治学 2013- II 危機と政治変動』2013(II), pp. 62-85, 2014, 査読無。
 27. Kazuya Nakamizo, “Political Change in the Bihar: Riots and the Emergence of Democratic Revolution,” Lall, Sunita and Shaibal Gupta eds., *Resurrection of the State A Saga of Bihar: Essays in Memory of Papiya Ghosh*, pp. 69-108, 2013, 査読無。

[学会発表] (計 30 件)

1. Kimitaka Matsuzato, “Social Background of Ukraine’s Turmoil,” セミナー報告、Faculty of History, Kolkata University, Kolkata (India), 3 February, 2017, 招待講演。
2. Kazuya Nakamizo, “National Issues in the Local Context: The Analysis of 2014 General Election and 2015 State Assembly Election in Bihar,” ADRI SILVER JUBILEE CELEBRATIONS 2016-17, Hotel Maurya, Patna, Bihar (India), 28 March, 2017, 招待講演。
3. 田原史起 「第二巻『ユーラシア地域大国の統治モデル』」パネルディスカッション「ユーラシア地域大国を考える」(「シリーズ・ユーラシア地域大国論」完結記念)、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市)、2016 年 5 月 14 日。
4. Kimitaka Matsuzato, “Rise and Fall in Ethno-Territorial Federalism,” セミナー報告、国立台湾政治大学宗教研究所、台北市(台湾)、2016 年 5 月 12 日、招待講演。
5. Kimitaka Matsuzato, “Muslim Administrations in Non-Arab Peripheries,” セミナー報告、中央研究院政治学研究所、台北市(台湾)、2016 年 6 月 15 日、招待講演。
6. Kimitaka Matsuzato, “The Donbass War: Outbreak and Deadlock,” The 7th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 華東師範大学、上海市(中国)、2016 年 9 月 24 日、招待講演。
7. Kimitaka Matsuzato, “The Donbass War: Outbreak and Deadlock,” ASEES 48th Annual Convention, Washington D.C. (USA), 17-20 November, 2016.
8. К.Мацузато, Неполная государственность, пополняемая трансграничными меньшинствами, на примере Черноморского побережья ленинградские грузины, приднестровские католики и крымские татары, Международной конференции: Проблема устойчивости политических систем современного мира, Российское общество политологов, Санкт-Петербург市(ロシア)、28-30 January, 2016.
9. Kimitaka Matsuzato, “Under the Anti-Donetsk Trend, a Struggle for Reunification with Russia Was Taking Place’: Domestic Politics in Crimea in 2009-2015,” セミナー報告、国立台湾政治大学、台北市(台湾)、2016 年 3 月 17 日、招待講演。
10. Kazuya Nakamizo, “Development as an Electoral Issue: Comparative Analysis of 2014 General Election and 2015 State Assembly Election in Bihar, India,” ISEC-Japan Seminar, Institute for Social and Economic Change, Bangalore (India), 27 December, 2016, 招待講演。
11. 田原史起 《作为“农村治理资源”的社会主义经验: 甘肃麦村的“集体”历程》中国当代史研究工作坊(第四届)《1950-60年代的中国》、京都大学人文科学研究所现代中国研究中心、华东师范大学中国当代史研究中心联合主办、京都大学(京都府京都市)、2015 年 12 月 5-6 日。
12. Fumiki Tahara, “A Village Perspective on Competitive Authoritarianism in Russia,” ICCEES IX World Congress, Kanda University of International Studies (千葉県幕張市), 7 August 2015.
13. Kazuya Nakamizo, “Election and Rural Society: A Comparison of Russia and India,” ICCEES IX World Congress, Kanda University of International Studies (千葉県幕張市), 7 August 2015.
14. 田原史起 《“发家致富”与打工经济: 探讨 21 世纪中国农民的精神》红河论坛第 206 场, 红河学院, 云南省蒙自市(中国), 2014 年 11 月 26 日、招待講演。
15. Fumiki Tahara, “Doing Fieldwork in Chinese and Russian Villages”, public seminar held in the Institute of Mass Communications and Social Studies, Kazan Federal University, Kazan (Russia), 5 September, 2013, 招待講演。
16. Kimitaka Matsuzato, “Imperial Studies of Russia and Japan,” ヤゲロ大学での講演, クラコフ市(ポーランド), 23 June, 2014, 招待講演。
17. Kimitaka Matsuzato, “Asiatic Russia: Geopolitics and Territorial Management,” International

- Conference “Eastern and Central European Empires, Nations, and Societies on the Verge of World War I,” Institute of Polish History, PAS, ワルシャワ市(ポーランド), 27-28 June, 2014, 招待講演。
18. К.Мацузато, Русско-китаиские отношения через призму православия 1713-2013, The 6th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Hanyang University, Seoul (Korea), 27-28 June, 2014.
 19. Kimitaka Matsuzato, “The Russian Orthodox Church’s Chinese Policy,” ASEES 46th Annual Convention, San Antonio (USA), 20-23 November, 2014.
 20. 中溝和弥「経済成長と宗教ナショナリズム: 2014年総選挙から見たインド社会」2014年度アジア政経学会西日本大会、京都大学(京都府京都市)、2014年11月29日。
 21. 中溝和弥「インド民主主義の危機—多数派支配の恐怖」日本南アジア学会市民講座「グローバル化する世界の中のインド—モーディ新政権のゆくえ」、東京大学(東京都文京区)、2014年10月11日。
 22. 田原史起「村のニューカマー: 『大学生村官』からみた中国社会」一般発表, 第21回地域文化研究専攻主催シンポジウム「地域とニューカマー: 対面・相剋・共生」, 東京大学駒場Iキャンパス18号館ホール(東京都目黒区), 2013年6月29日。
 23. Kimitaka Matsuzato, “The Rise of Salafism and the War on Terror in Dagestan,” BASEES/ICCEES Congress “Europe: Crisis and Renewal,” Cambridge University, Cambridge (UK), 5-8 April, 2013.
 24. Kimitaka Matsuzato, “Perspective on Central Europe and Eurasia from Outside the Euro-Atlantic World,” Seminar at IERES, Eliot School, George Washington University, Washington, DC (US), 16 April, 2013, 招待講演。
 25. Kimitaka Matsuzato, “Russia’s Geopolitics vs. ‘Orange’ Rebellions: Government Changes in Abkhazia, South Ossetia, and Transnistria in 2011-2012,” ASN 18th Annual Convention, Colombia University, New York (USA), 18-20 April, 2013.
 26. Kimitaka Matsuzato, “The party of Regions of Ukraine and Donets’k Politics: A Peculiar Way to Authoritarianism,” The 5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Osaka University of Economics and Law (大阪府八尾市), 9-10 August, 2013.
 27. Kimitaka Matsuzato, “Expansion of the Party of Regions of Ukraine from Donets’k to Crimea: Elite Reshuffling and Inter-cultural Encounters,” ASEES 45th Annual Convention, Marriot Boston Copley Place, Boston (US), 21-24 November, 2013.
 28. Kazuya Nakamizo, “Secularism and Federal Space: The Study of Religious Conflicts in India,” INDAS International Symposium “In Search of Well-being: Genealogies of Religion Politics in India,” Ryukoku University (京都市伏見区), 15 December, 2013.
 29. 中溝和弥「暴力と市民社会—インド・グジャラート州の事例」アジア政経学会2013年度全国大会、立教大学(東京都目黒区)、2013年6月16日。
 30. 中溝和弥「インド民主主義の現在—下剋上とその後の展開」中央大学政策文化総合研究所ワークショップ、中央大学(東京都八王子市)、2013年7月12日、招待講演。
- [図書] (計 1 件)
- Kimitaka Matsuzato ed., *Russia and Its Northeast Asian Neighbors: China, Japan, and Korea, 1858-1945*, Rowman & Littlefield, pp. 1-222, 2017.
- [産業財産権]
- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)
- [その他]
ホームページ等
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
- 田原 史起 (TAHARA, Fumiki)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 20308563
- (2) 研究分担者
- 松里 公孝 (MATSUZATO, Kimitaka)
東京大学・大学院法学・政治学研究科・教授
研究者番号: 20240640
- 中溝 和弥 (NAKAMIZO, Kazuya)
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究・教授
研究者番号: 90596793